

宮本久雄

星はめぐり、人の子の生は短し。その生と言の痕跡は、星の軌道にやがて吞まれ、後は何事もなかつたかのように星はめぐり、永遠の黙もたしは続く。

しかし、彼の生の消滅の一瞬に、一条の光芒が放たれる。その光芒は、生きとし生ける者の生命の輝きである限り、生命ある縁者たちのある者に届く。届かざるもあり。

もしその一瞬の光芒が、教父の生であり、教父の言であるなら、そしてその縁に与ろうと願うなら、人の子は心をすまし聴従する以外にあるまい。その聴従が一人ひとりの生ける道となり、あるいは学びを友にする縁えんある者たちの道となるからである。

しかあれば、この縁を教父からの招きとして共に学びの道に立つことは、人の子のはかなき生にあつ

て、一つの言祝ぎといえまいか。

めぐる星を仰ぎ観つつ、生の短きをいよいよ思えば。

燈々無尽

平成二七年霜月